

リスクマネジメント研究部会

FMを取り巻くリスクマネジメント

リスクマネジメント研究部会 関山 雄介 せきやま ゆうすけ

大成建設株式会社 ライフサイクルケア推進部
耐震推進室 室長
認定ファシリティマネジャー

昨年は熊本地震が発生し、改めて地震災害の影響が再認識された。

特にFM分野においては、地震や風水害、雪害などの自然災害、あるいは事件・事故等、さまざまなリスク要因が施設の運営維持に大きな影響を与えている。

一方、阪神淡路大震災や東日本大震災から時間が経過するとともに、FM分野においても人事異動等によりリスクマネジメントに関するノウハウの伝承が課題となっている。最近では、2~3年でさまざまな部門を異動しキャリアを積むオールマイティの人材育成が一般的となってきたことから、リスク管理・危機管理の人財も新陳代謝が激しくなっている。

リスクマネジメントは「もしも〇〇が発生したら・・・」と想定し、そのリスクを評価し、事前対策を行い、発生時の対応を行う一連のマネジメント手法である。ファシリティマネジメントを進めるうえでも、リスクを考慮し評価して取り組みの目標が達成できるようにさまざまな工夫が必要である。

昨年も、4月の熊本地震や太平洋岸を迷走して上陸し大きな被害を出した台風10号などさまざまな災害が発生した。また、冬の暴風雪や糸魚川の大火、阿蘇山の噴火なども社会や企業活動に大きな影響をもたらした。

このようなリスクに対し各企業は、防災対策等を進めるとともに事業継続に関する取り組みを行っている。内閣府の調査結果によると大企業においては、2007年では2割に満たなかった策定

済みが6割になっている。近年の地震や風水害等によって事業継続管理について重要性が認識され企業の取り組みが進んだと考えられる。ただし、具体的な取り組みについては「策定済み」が増加しているものの、策定中を含めた回答は頭打ちとなってきており、一層の普及に課題が残っている。一方、われわれファシリティマネジメントに関係が深い不動産業やサービス業においては、事業継続の取り組みはまだ3割弱にとどまっており今後の取り組みが必要である。

リスクマネジメントはリスクを見逃してはならないが、そのためには空振りを容認する組織文化が必要である。また、大きく構えて小さく収めることが肝要となる。

孫子の言葉を借りれば、まさに「彼を知り、己を知れば、百戦して殆(あや)うからず。彼を知らず、己を知れば、一勝一敗す。彼を知らず、己を知らざれば、戦うごとに必ず殆(あや)うし」であり、リスクを知らなければ、準備も足りず必ず大きな被害を受けることになる。事業継続の取り組みなど平素の「備え」が重要である。

